

# 学級活動の研究

白井 政之



## 🔑 キーワード

新たな仲間観      共感的な態度      自己有用感

## 🔑 主張

本研究では、「新たな仲間観を形成し、仲間とともに活動を創りあげる子ども」を目指す。新たな仲間観とは、仲間と自分の考えとの違いをわかった上で、仲間の考え方のよさを積極的に理解し、互いの異なる部分も認めていこうとする価値観である。

子どもたちの中に新たな仲間観を形成していくことにより、自分のよさとともに仲間のよさも生かしながら活動を創りあげていく姿が期待できる。

本研究では、共通の願い具現に向けた活動を通して個々の自己有用感を高め、共感的な態度を育みながら新たな仲間観を形成していく子どもの姿を目指した。

# I 新たな仲間観を形成し、仲間とともに活動を創りあげる学級活動

## 1. 学級活動で求める子ども

研究主題「創造的な知性を培う」のもとでの学級活動では、求める子ども像を「新たな仲間観を形成し、仲間とともに活動を創りあげる子ども」と設定した。

新たな仲間観とは、仲間と自分の考えとの違いをわかった上で、仲間の考え方のよさを積極的に理解し、互いの異なる部分も認めていこうとする価値観である。

新たな仲間観を形成していくためには、自己有用感の上に立った仲間への共感的な態度を育てていくことが大切である。共感的な態度、つまり、相手の考えのよさを認め、ともに活動を創りあげる仲間として肯定的に受け入れていこうとする姿勢は、自分自身が周りから認められ受け容れられる経験（個々の自己有用感が高められる経験）によって育まれていくからである。

新たな仲間観を形成していくことにより、互いに相手の考えを解釈し認め合い、自分のよさとともに仲間のよさも生かしながら活動を創りあげていく姿が期待できる。

このような学びを以下のようなカリキュラム改善、授業改善により具現していこうと考えた。

## 2. カリキュラム改善の視点

新たな仲間観は、年間を通じて段階的に形成されていくものである。附属長岡小学校では、カリキュラムを編成していくための視点として、共感的な態度の段階的な育成を考えている。例えば、第4学年では、以下のように年間のカリキュラムを構成した。

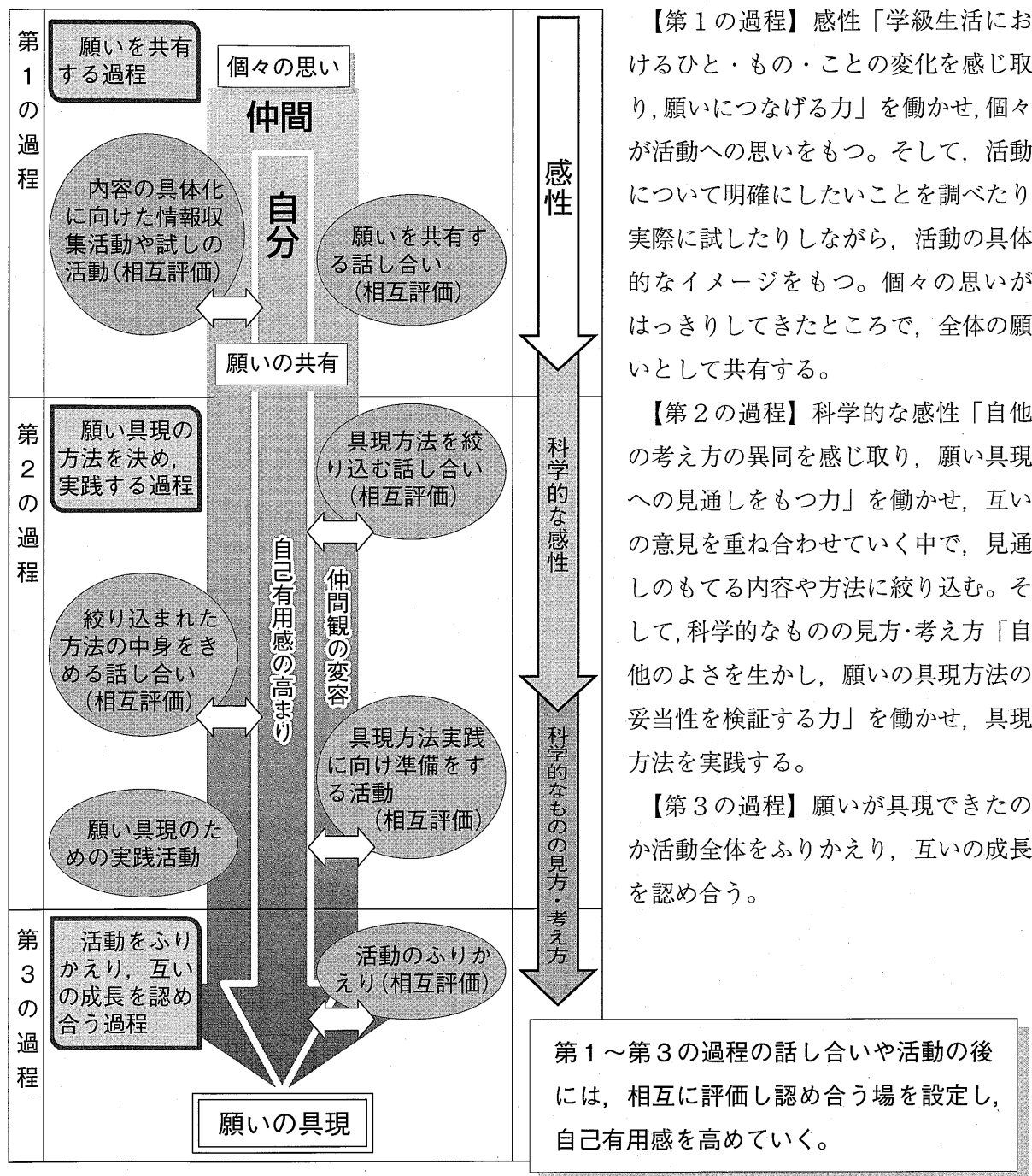
(主として学習指導要領(1)「学級や学校の生活の充実と向上に関すること」の内容に関わるもの)

月	共通の願いの具現に向けた活動	
4	仲良し度アップ大作戦	10 <b>協力・創り出し活動PART II</b> (わたしたちの科学おもしろ実験教室を開こう)
5	学級の合い言葉・シンボルをつくろう	11 教生先生を迎える会・送る会をしよう
6	401オリジナル会社をつくろう	12 仲良しフェスティバルに向けて全校一の出店をつくろう
7	<b>協力・創り出し活動PART I</b> (「栖吉川いかだ下りの旅」に出場しよう)	2 <b>協力・創り出し活動PART III</b> (2組と協力して最高の6送会にしよう)

各学期に「協力・創り出し活動」を設定する。これは、「やってみたい」という子どもたちの興味・関心・意欲を第一に考え、協力するクラスを目指して取り組む活動であり、新たな仲間観形成に向かうメイン活動である。興味・関心・意欲を喚起する活動であるほど、個々のこだわりも強く、そのこだわりを互いに認め合うことが新たな仲間観の形成につながる。1学期は、仲間のよさに気づき、一人一人が満足感をもって参加できる活動を目指した。2学期以降は、1学期に得た達成感や自信を活動につなげ、お互いのよさを積極的に生かそうとする態度を求めていく。

### 3. 授業改善の方策

学級活動における学習過程を以下のように整理し、「感性, 科学的な感性, 科学的なものの見方・考え方」を以下のように位置づけた。



### 4. 評価方法

学級活動では, 子ども自身が自己有用感や仲間観の変容を実感できる自己評価や相互評価の場を大切にします。学級活動ノートを活用し, 友達の考えを聴きながら自分の考えをまとめさせる。そうすることで, 1時間の自分の考えの変容が記述に表れるようにする。また, ふりかえりを書く際には, 「考えをもてたか」「発言できたか」「自分の役割を果たすことができたか」といった自己評価項目とともに, 「なるほど!と思った仲間の考え」「活動が光っていた人」といった相互評価項目を設け, 互いのよさを認め合い理解し合えるようにする。

## II 実践の概要

第4学年

「401オリジナルいかだで『栖吉川いかだ下りの旅』  
に出場しよう」～協力・創り出し活動PART I～

### 1. 協力できるクラスに向かい、全員が意欲的に参加できる活動を創りあげる子どもを求めて

本活動は、年間を通して新たな仲間観を形成していくメインの学級活動「協力・創り出し活動」の第一弾である。本活動では、子どもたちの「もっと協力できるクラスになりたい」という思いをもとに、学校沿いを流れる栖吉川で開催されるイベント「栖吉川いかだ下りの旅」にオリジナルいかだを作って出場することを取り上げた。オリジナルいかだでこのイベントに参加するためには、いかだのデザインの決定、制作、試しの活動といった集団活動を行うことが必要である。その中で、個々の役割分担を明確にし、互いの活躍を認め合いながら自己有用感を高める姿が期待できる。「協力・創り出し活動」は子どもたちの興味・関心・意欲を第一に考える活動であるため、活動に対する個々のこだわりも強く、意見のぶつかり合いも生じてくる。このような過程を通して互いの考え方のよさを認め、ともに活動を創り上げる仲間として肯定的に受け入れていこうとすることで、仲間のよさを実感し仲間観を変容させていく姿が期待できる。

夢をふくらませ、仲間と協力して401オリジナルいかだを作ったり、いかだに乗ってみたりする中で、一学期では、仲間のよさ・一人一人が満足感をもつことの大切さに気づき、意欲的に活動に参加する子どもたちの姿を願った。

### 2. 活動の構想

#### (1) 活動の目標

みんなの願いを具現できるいかだ下りにするために話し合ったり活動したりする中で、協力できるクラスを求めていくためには一人一人が満足感をもつことが大切であることに気づき、全員が意欲的に参加できる活動にしていくことができる。

#### (2) 追求の構想（5時間）

##### — 1次「いかだ下り出場のために必要なことをはっきりさせよう」（3時間） —

- ①「栖吉川いかだ下りの旅」への出場について考え、必要なことをはっきりさせる。
- ②どんないかだ下りにしたいのか、個々の願いを学級全体で共有する。
- ③ベースになるいかだを作り、実際にプールで試乗する。

##### — 2次「アピール方法を考え、『栖吉川いかだ下りの旅』に出場しよう」（2時間） —

- ④試乗結果や調べたことをもとに話し合い、願い具現の方法を絞り込む。
  - ⑤願い具現の方法（401のオリジナル感をアピールする条件）をきめる。
- 条件をもとにチームごとに協力していかだ作りをする。（放課後）
  - 「栖吉川いかだ下りの旅」に出場する。（夏休み）

##### — 3次「願いを実現することができたか、活動全体をふりかえろう」（夏休み） —

- 願いを具現することができたか、自他の成長は見られたか活動全体をふりかえる。

### 3. 授業の実際

#### (1) オリジナルいかに401の個性を出そう（願いを共有する第1の過程①）

竜太さんは、発想豊かでクラスのアイディアマンである。ユニークな意見で、いつも学級を盛り上げている。しかし、意見のぶつかりあい自体を楽しもうと意図的に対案を出したり、自分の考えを曲げずにいつまでも固執したりすることがある。「栖吉川いかに下りの旅」への参加を通して、自分のよさを生かし、意欲的に活動を創り上げていくことで、自己有用感を高めるとともに、友達の活躍を認めサポートする姿を期待した。

もっと協力できるクラスにするためにはどんな活動に取り組んでいったらよいのか考えを出し合う中、「栖吉川いかに下りの旅」のポスターを興味深く眺めていた竜太さんは、「栖吉川を自分たちで作ったいかに下りで下ることで感動できる。401の仲間も深まると思う。それに、401の合い言葉『なかよくチャレンジ』にもつながる。」と発言した。

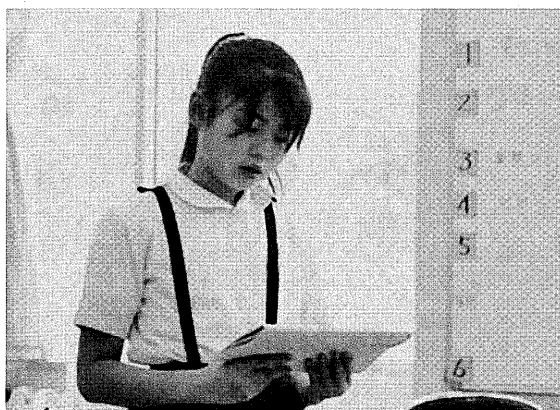
感性「学級生活におけるひと・もの・ことの変化を感じ取り、願いにつなげる力」を働かせ、いかに下りに参加することの意味を自分なりに考えてきた竜太さん。401としていかに下りに参加することが決まると、よく浮かぶいかに下の仕組みについて意欲的に調べたり、「いかに下のデザインはアレンジしてもいいんですか？」と質問するなど、いかに個性を出したいという気持ちを高めてきた。

学級の中でも、いかに下のデザインについて次のように考え方が分かれた。

A案：いかに下のデザインに共通の条件をつける。

B案：グループごとに自由なデザインにする。

そこで、どちらの方法で進めるのか、話し合いをもつことにした。



グループのオリジナルいかに下ではなく、401オリジナルいかに下だから、みんなで意見を出し合って、共通の条件を決めた方がいいと思います。

ABどちらの考えでもいいと考えていた竜太さんであったが、裕子さんの意見を聞き、次のように発言した。



お、そっか！401のオリジナルということ忘れていた。

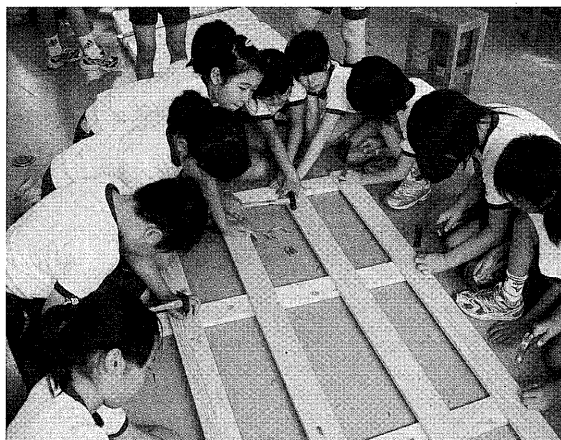
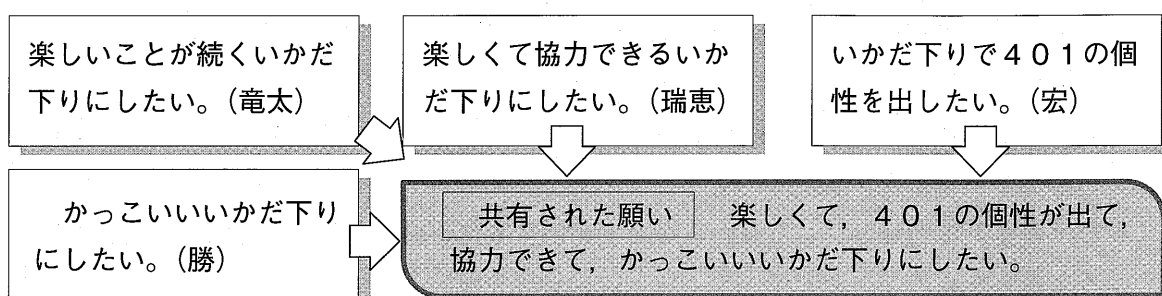
いいことを思いついた。AとBどちらの考えのよさも生かす方法として、みんなが納得するデザインで統一して、残りの部分はグループごとに自由に考えればいいと思う。



活動のねらいに照らして、401としての個性を出すことの大切さに目を向けてきた竜太さん。科学的な感性「自他の考え方の異同を感じ取り、よりよい方法を考え、願い具現への見通しをもつ力」を働かせ始めた姿である。授業後の相互評価でも、自分の発言を賞賛する仲間の記述を満足そうに読み、仲間に認められたという思いから、竜太さんは自己有用感を高めていった。

(2) いかだのベースになる部分を作り、プールに浮かべてみよう（願いを共有する第1の過程②）

話し合いの中で、「401らしく個性を出したい」といういかだ下りへの思いを出し合う子どもたち。どんないかだ下りにしたいのか願いを共有する話し合いを組織することにより、以下のように全体の願いとしてまとめられた。しかし、実際にいかだを作っていないことやいかだに乗った経験がないことから、活動への見通しを十分にもてずにいた。



<いかだの試作品づくりの様子>

2台のいかだの試作品ができあがり、プールで浮かべてみることになった。

はじめは、手作りのいかだに慎重に乗ってみる子どもたち。人を乗せても浮くことが分かり、クラスみんなでいかだに乗る楽しさを感じることができた。

試乗後の竜太さんのふりかえり

よく浮かんで4人まで乗れた。やろうと思えば5人～6人まで乗れる。今度は、みんなのアイデアをいかだにつめこみたい。

そこで、いかだ下りのイメージをもてるよう実際にいかだを作る「試しの活動」を行った上で、再びどのようにオリジナル感を出していくのかを考えていくことにした。

いかだ作りに向けて、家でいかだの設計図をかき、自分のアイデアを採用してほしいとアピールする竜太さん。いかだの土台の部分の作成においても、釘の打ち方や発砲スチロールの縛り方など、仲間に作り方の指示を出しながら活動を進めた。



<いかだに試乗する竜太さん>

(3) 401のオリジナル感をどうアピールすればいいのだろうか（願い具現の方法を決め、実践する第2の過程）

楽しく乗ることができたものの、乗ることによって問題点も見えてきた。

「いかだに乗ってみて楽しかったけど、一度にたくさん乗ると沈むことがわかった。」「ふざけて乗っている人がいたので、あぶなかった。」などの意見が出された。

周りの意見を聞きながら、

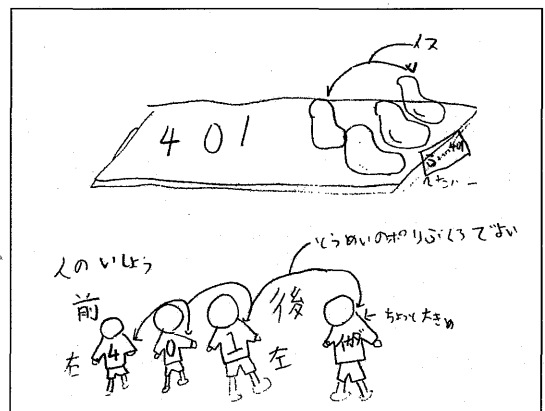
「楽しかった。でも、安全じゃないから、立ち乗りはだめだと思う。固めの設計にして、安全ないかだにした上でアイデアをつけていったら、どうかな。」と発言した竜太さん。いかだの乗り方では401の個性（オリジナル感）をアピールするのが難しいということに気づいた。その発言を受けて、子どもたちは、どういう形で401のオリジナル感をアピールしたらいいのかを考えていった。竜太さんは、すぐに学級会ノートにオリジナルいかだの図を描き、次のように自分の考えを発言した。

「401のオリジナル感は、いかだの飾りや衣装で出した方がいい。みんなが納得できるデザインを条件にすればいいと思う。」と、デザインでオリジナル感を出すことに加え、衣装でオリジナル感を出すという新しいアイデアを提案した。ビニール袋に401をアピールするようなデザインを描き、それを着ていかだ下りをするというものである。前に考えた「みんなが納得できるデザインを条件にする」という案を再び持ち出したのは、仲間の考えのよさも生かしていこうとする姿である。この案にも仲間の賛成をもらい、条件の中身を決める方法について話し合うことにした。

竜太さんは、条件を決める方法として次のように自分の考えを述べた。

アイデアが浮かばない人もいるから、全員が必ずデザインを考えなくてもいいと思う。アイデアの出せる人がデザインを考えて、出されたものの中からみんなで話し合って決めればいい。

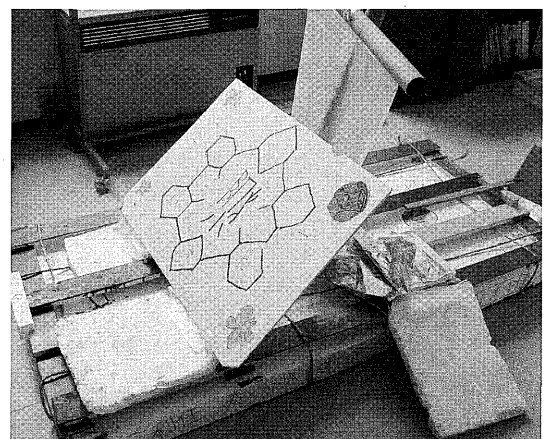
衣装などもデザインして、みんなで話し合って決めていきたい。



<竜太さんの考えたいかだと衣装の図>

デザインのアイデアが思いつかない子への配慮をしながらも、一部の考えで条件を決めるのではなく、みんなで話し合って決めたいという思いを高めている竜太さん。

竜太さんのアイデアである衣装も条件として採用され、いかだづくりとともに衣装づくりにも力を入れることになった。アイデアを周りから認められたことで、さらに自己有用感を高めた竜太さんは、グループのリーダーとして、全員が協力していかだ作りができるよう考え、男女で役割を分担するなど中心になっていかだ作りを進めた。



<竜太さんのグループの作成したいかだ>

(4) 401オリジナルいかだ隊参上！（活動をふりかえり、互いの成長を認め合う第3の過程）

いよいよ迎えた「栖吉川いかだ下りの旅」当日。オリジナルの衣装をまとい、堂々とオリジナルのいかだに乗る竜太さんの姿があった。チームの仲間と協力しいかだ下りを楽しんだ竜太さんは、イベント終了後、次のようなふりかえりをカードに書いた。



「いかだ下りの旅」参加後の竜太さんのふりかえり

3分の1の人が参加できなかったから、みんなの願いの達成度は76%だった。でも、みんなと一緒に心をつなぐいかだ作りをしたり、いかだ下りをしたりして、401は協力するということについて成長したと思う。

竜太さんは、夏休み中のイベントということもあり全員参加ができなかったことを残念に感じていた。

それは、一部の考えで決めたり一部が参加するのではなく、みんなで話し合ってみんなで参加したいという思いを持ち続けていたからである。自分の考えや行動が周りから認められ、自己有用感を高めながら、一人一人が満足感をもつことの大切さに気づいていった姿であると評価する。

### Ⅲ 成果と課題

＜成果＞ 子どもたちがこだわりをもった問いを生んでくるには、考えの根拠となる体験活動の場を第1の過程で設定することが大切であることが見えてきた。

第1の過程で、子どもたちが試しの活動（いかだを実際に作ったり、乗ってみたりする活動）を体験していることが第2の過程で内容や方法を絞り込む際に有効に働いてくる。目的意識をはっきりさせてから体験活動を行い、それについての感想が十分に出されることにより、話合いの土台が作られる。そして、一人一人の思いのこもった話合いとなる。

＜課題＞ 自己有用感と新たな仲間観の形成をつなぐ話合いをいかに組織していくか。

竜太さん自身はこの活動の中で自己有用感を高め、仲間のよさに気づくことができた。しかし、友達の活躍を認めサポートする姿勢に弱さを感じた。話合いや活動の中で、自分と異なる仲間の考え方に共感したり、積極的に仲間のアイデアを生かそうとしたりする場面を創り出すことができなかったからである。互いの考え方の一致する点を積極的に出し合った上で、異なる点についても共感し合うような話合いを組織できたならば、自分の考えをより確かなものにすると同時に、仲間観を変容させていく姿が期待できたと考える。そして、仲間のアイデアをいかだづくりの中に積極的に取り入れ、もっとみんなが満足する活動を意識できたに違いない。

＜主な参考文献＞

橋本 定男 1997 「子どもが力をつける話合いの助言」 明治図書